

イギリスにおける奴隷貿易・奴隷制廃止運動とキリスト教勢力

講演	布留川 正博【ふるがわ・まさひろ】
講師紹介	同志社大学経済学部教授 〔研究テーマ〕大西洋奴隷貿易史・奴隷制史

大西洋奴隷貿易

私は同志社大学大学院経済学研究科にいる時から大西洋奴隷貿易のことを研究しております。近代奴隷制のことや、特にイギリス領植民地、ブラジルに関することなどを研究してまいりました。ここ20年ほど、「イギリスにおける奴隷貿易と奴隷制の廃止運動」の研究をしてきましたので、今日はそれについてお話ししたいと思います。イギリスは産業革命の時代、18世紀第4四半期から19世紀前半にかけて、奴隷貿易・奴隷制廃止運動が行なわれ、最終的にはイギリスにおいて奴隷制が廃止されました。約半世紀にわたるストーリーを具体的にみなさんにお伝えできればと思います。2019年8月に出版した『奴隷船の世界史』（岩波新書）では、奴隷貿易の歴史と実態、現在の奴隷制までを凝縮してわかりやすく書いたつもりですが、その中の後半部分についてみなさんにお話ししたいと思います。2020年3月に私は定年退職となりますが、こういう機会をいただいております。

15世紀後半から19世紀前半までの約400年間、ヨーロッパ各国の商人たちは奴隷貿易を行ってきました。生きて上陸させられた奴隷の数は最新データで約1070万人とされています。ほとんどがカリブ海諸島を含む南北アメリカに荷揚げされた奴隷の数ですが、アフリカからは約1250万人くらいが積み出されています。奴隷貿易はアフリカ沿岸で行われますが、アフリカといっても西アフリカのセネガル、ガンビア、シエラ・レオネや、黄金海岸（現在のガーナ共和国）、奴隷海岸（現在のベナン共和国）、さらにコンゴ、アンゴラ地域から積み出された奴隷が多かったと言われています。また、東アフリカのモザンビーク、マダガスカル島からも、大西洋奴隷貿易で奴隷たちが積み出されてきました。奴隷たちは過酷な奴隷船の中での身動きができない状態で詰め込まれ、1カ月半あるいは2カ月に及ぶ航海を経て南北アメリカの各地に渡って行きました。アフリカの沿岸から積み出された1250万人のうち、生きて上陸したのが1070万人、つまり航海中に死亡した奴隷の死亡率は14・5%になります。

大西洋の奴隷貿易は「三角貿易」と言われています。ヨーロッパのイギリス、フランス、ポルトガルなどの港から、綿織物、銃・火薬、ビーズ、アルコール類（ラム酒、ワイン、ブランデー）などをアフリカの貿易拠点に持っていき、そこで奴隷と交換して、カリブ海諸島を含む南北アメリカに運びました。ここで奴隷たちが労働力として使われ、生産された植民地物産（その典型的なものには砂糖、コーヒー、綿花、タバコ、カカオ等）がヨーロッパに送られて消費されました。これが儲かったと言われ、奴隷貿易を行っていた商人たちは多くの資本を蓄積することができました。

奴隷貿易とは何であったのか。先駆者はポルトガルでしたが、その後、オランダ、フランス、イギリスなどが奴隷貿易を始めます。アメリカ合衆国の奴隷商人もいました。おおまかに言うと、ポルトガル、オランダ、フランス、イギリスのような国々が主要な奴隷商人の輩出国でした。その中でイギリスがどれくらいのシェアを占めていたか、これそのものが大きな問題です。奴隷貿易が盛んだったのは18世紀で、イギリスの奴隷貿易港として有名なのはロンドン、ブリistolとリヴァプールでした。18世紀後半になると、圧倒的なシェアを誇っていたのはビートルズの出身地リヴァプールです。18世紀の奴隷貿易においてこの3つの港を含むイギリス全体でシェアは4割近くでした。イギリスは自分の植民地に奴隷を送るだけではなく、スペイン領アメリカやフランス領西インドにも奴隷を運んでいました。

奴隷貿易・奴隷制廃止概観

しかし、その奴隷貿易大国であったイギリスにおいて、奴隷貿易廃止や奴隷制廃止が広範な大衆運動として起こってきます。その中でキリスト教の二つの宗派が大きな役割を果たしました。一つはイギリス国教会（アングリカン）の福音主義派とされる人々が中心にいました。のちに彼らはクラバム派と呼ばれました。もう一つは非国教会系のクウェイカー教徒で、奴隷貿易廃止運動を始めた宗派として重要な役割を果たしています。

歴史的経緯を概観しますと、ロンドンにおいて1787年5月23日に「ロンドン・アボリション・コミティー」という委員会ができます。最初は12名でしたが、先ほど述べたクウェイカー教徒とイギリス国教会福音主義派がそのメンバーでした。組織の中心はロンドンでしたが、全国各地に組織を広げていき、奴隷貿易を廃止するためのキャンペーン、議会請願運動、署名活動を行います。第一次、第二次署名活動、また女性たちが深くかかわる「砂糖の不買運動」もありました。奴隷貿易廃止法案は中々通らなかったのですが、最終的に20年後の1807年3月に奴隷貿易廃止法が成立します。その後「アフリカ協会」が結成されて、他国に対する奴隷貿易廃止キャンペーンを展開します。

時期を1780年代に戻しますと、「在英黒人」たちをシエラ・レオネに送り込んでそこで生活させようとしていました。結果的にはここに植民地をつくるわけですが、シエラ・レオネの植民地の形成と奴隷貿易廃止運動が同時並行的に進行していきます。

次の目標は奴隷制廃止で、ロンドンで反奴隷制協会が1823年に結成されました。運動の過程で、1831年12月25日クリスマスに、「クリスマス反乱」といわれる大規模な奴隷反乱がジャマイカで起こりました。その後、請願署名運動が行われ、最終的には150万人分の署名が集まり、それをバックに1833年に奴隷制が廃止されました。奴隷制が廃止されても奴隷たちは年季奉公人として元の奴隷主の下で働かなければなりません。年季奉公人制が廃止されるのは1838年のことです。

サマーセット事件

イギリスの植民地が形成されるのが17世紀です。1607年にヴァージニア植民地ができ、その後、西インド諸島に植民地が形成されました。バルバドス、ジャマイカ、アンティグアなど、小さい島々で奴隷制砂糖プランテーションが形成されます。それが当時のイギリスにとっては重要な経済活動であり、砂糖は重要な消費物資でした。奴隷のほとんどは植民地で使役されていますが、その一部が奴隷主とともにイギリス本国に来る場合があります。彼らを在英黒人と呼んでいます。はっきりした人数はわかりませんが、1780年代にロンドンに在英黒人が少なくとも5000人はいたのではないかとされています。

この在英黒人の中にサマーセットという黒人がいました。裁判沙汰になりました。1769年11月、スチュアートという奴隷主が北米のヴァージニア植民地で奴隷として購入したサマーセットを連れてイギリスにやって来ます。ところがサマーセットが奴隷主のもとから逃げ出したものの、すぐに捕まりました。スチュアートは彼をジャマイカで奴隷として売りとばそうと準備しますが、船にサマーセットがつかがれている時にサマーセットの支援者がやってきて彼を助けます。そして、サマーセットの身分をめぐる裁判が起こされたのが、サマーセット事件です。この事件の争点は、「イギリス本国、イングランドにおいて奴隷の存在を認めるかどうか」でした。ところが最終的には、マンフィールド裁判官は「サマーセットを釈放する」という簡単な判決を下します。イングランドで奴隷の存在を認めるかどうかという真正面からの判決ではなく、単に「釈放する」という判決しか下していません。しかし、この判決について「イングランドでは奴隷の存在は認めないという判決が下された」と新聞などで報じられたので、一般には「奴隷制はイングランドにおいては認めない」と理解されたわけです。

ロンドン委員会の結成

この裁判の支援者の一人にグランヴィル・シャープがいました。アボリションというのは奴隷貿易・奴隷制廃止を意味しますが、彼はロンドン・アボリション・コミティーの議長になりました。このロンドン委員会は1787年5月23日に結成されて、クウェイカー教徒が9人、国教会の福音主義派が3人でした。後者の中にグランヴィル・シャープやトマス・クラークソンがいました。クラークソンは大衆運動家、各地を旅して奴隷貿易廃止を訴えました。シャープを議長に、クウェイカー教徒のホア・ジュニアを会計に選出して、当面の目標を奴隷貿易廃止に設定しました。実はそこで議論があり、シャープは最初から奴隷制廃止をやるべきだと反対しました。しかし、奴隷というのは財産（動産）です。私有財産権の保証に抵触する奴隷制廃止を最初から掲げることは難しいと判断して、ロンドン委員会は当面の目標を奴隷貿易廃止にしました。この決定については、当時のロンドン委員会の議事録が残っていて、その時の議論を追っています。この時に委員会の中でやるべきこととして、まず奴隷貿易の実態に関する情報を収集すること、奴隷貿易反対のための小冊子を発行すること、活動資金のための寄付金の募集、全国展開するために必要な地方支部組織を拡大していくことが決められました。

クウェイカー教徒

クウェイカー教徒は日本では少数派で現在は3000人くらいしかいないと言われています。有名な人で新渡戸稲造がいますが、私がクウェイカー教徒に接したのは20数年前、イギリスのヨーク大学へ客員研究員として在外留学していた時でした。ヨークの町にクウェイカー教徒たちがいて、毎週日曜日にフレンズ・ミーティング・ハウスに集まってサイレント・ミーティングを行っており、私もよく通っていました。実際にそういう人たちと話をすると、今でも平和運動、環境保護運動などにクウェイカー教徒が関わっていることを知りました。あるサイレント・ミーティングでは広島島の原爆の話が出てきて、ある人が立ち上がってその話をします。世界の平和に関心をもち、そのような伝統があるのだなと思いました。クウェイカーの誕生は1650年代でその創始者はジョージ・フォックスです。彼は奴隷制そのものを否定しているわけではないのですが、奴隷主は自分の金で買った黒人が忠実に仕えてくれたのなら終身奴隷とするのではなく、年月を経て彼らを自由にすべきだと説きました。18世紀のジョン・ウルマンはもっとラディカルで、奴隷所有はキリスト教の信仰と相容れないと考えていました。クウェイカー教徒が奴隷取引に従事することを非難し、奴隷労働によって生産された藍色の染料を使う衣服を着用したり、砂糖、ラム酒を消費するのを断固として拒否し、敢然と奴隷貿易や奴隷制に反対しました。

18世紀後半、クウェイカー教徒たちの決議が相次ぎました。目立ったところでは1758年、ロンドンの年次会で奴隷貿易に手を染めないように勧告をしました。勧告だけなのですが、奴隷貿易を批判する点で初めての姿勢を示しました。この総会の決議は北米植民地にも伝わり、クウェイカー教徒がつくった州として有名なペンシルベニア、その他ニューヨーク、メリーランド、そしてスコットランドのエジンバラなどが、それに呼応しました。1760年にはフィラデルフィアの年次会で奴隷制に反対する感情がこの町や他の北米植民地でも高まっている、と報

告されています。さらに1761年5月、ロンドンの年次会では、奴隷貿易に従事するイギリスの会員はクウェイカー教徒のフレンズ会から除名されるという決定が下されています。これはかなり強い決定でした。

クウェイカー教徒たちの精神は、キリスト教の平和主義的などころを強調していると思います。戦争があった時、クウェイカー教徒は回避する伝統をもっています。その中で人道主義という言葉が出てきます。クウェイカー教徒だけではなく、他の宗派でも「他人が我々にしてくれることを期待するのと同じことを、他人にしてあげなさい」とされています。具体的な状況として、奴隷貿易はアフリカ人の家族、父母から子どもを引き離したりする悲惨極まりない取引であり、家族の立場に立ったら許すべからざる所業であると弾劾されました。奴隷貿易の中では家族離散というディアスポラのイメージは強く、家族離散の絵が作成され、それが奴隷貿易廃止に結びつきました。

ところが、クウェイカー教徒も実は奴隷貿易に手を染めたり、奴隷主になったこともありました。クウェイカー教徒の中でも事業に成功して富を貯える人が出てきて、本来は慈善事業に使うべきですが、これを自身の贅沢な生活や投資に使ったりしました。目に余ったのが奴隷取引と奴隷の所有で、伝統的な初期のクウェイカー教徒の精神から逸脱するということが強調されました。奴隷所有や奴隷取引の事業を弾劾することによって、フレンズ会は「悪魔の世界」から手を引き、「善き仕事」に戻ることができ、本来のアイデンティティを取り戻すために、奴隷貿易廃止、奴隷制廃止の運動に入っていたと考えられます。ロンドン委員会結成前の1783年に、すでにクウェイカー教徒だけの組織ができており、下院に奴隷貿易廃止を訴える請願署名を行っています。

国教会福音主義派（クラバム派）

もう一つの宗派、国教会の福音主義派について最初の歴史的事実を見ると、ロンドンのテストン教区に慈善活動家のエリザベス・ブープリという女性の所領があり、マーガレットとチャールズ夫妻が共同生活していました。マーガレットは動物愛護運動に、チャールズは軍人で、水兵のモラル向上に取り組んでいました。この大きな所領には病気の貧困者、浮浪者の施設があり、有名な劇作家・詩人のハナ・モアや、チェスター主教のポーティウスなどもしばしばここを訪れました。

ここに大物が登場します。1781年に、テストン教区の牧師としてジェームズ・ラムジーが来ました。この人は20年くらいイギリス領西インド諸島で布教活動を行っており、奴隷制の実態、奴隷の厳しい状態、奴隷主がどうしているかを具体的に知っていました。そのような話をテストン教区に集まっていた人たちの間で話したところ、ほとんどの人が奴隷制の実態を知らなかったで、大きな感銘を与えました。彼らの勧めで1784年に『英領砂糖植地におけるアフリカ人奴隷の処遇と改宗についてのエッセイ』という本を出版することになりました。300頁もの大部の書物で、これが当時の人々にかなりの影響を与えました。奴隷制の実態がわかったと同時に、鞭打ちや虐待を伴う、キリスト教に反する忌まわしい行いであることを知らせることになり、奴隷制廃止に反対する勢力を作り出すセンセーショナルな本となりました。産業革命の時代に労働者階級が形成されますが、「労働者の方が奴隷に比べて労働時間、賃金等々、もっとむごいではないか。奴隷のことばかり心配するよりもイギリス本国の労働者を心配しなさい。西インドの奴隷の方がまだマシだ。」といった反対意見も呼び起こしました。ラムジー自身は奴隷をキリスト教化することがイギリスの利益になると本の中で訴えかけたのですが、そこで描かれた実態がリアルであったため大きなインパクトを及ぼしました。

そこに登場したのが、ケンブリッジ大学出身のウィルバーフォースとクラークソンです。1780年代、ビットという人が20代で出てきて首相になりましたが、この人もケンブリッジ大学出身です。ウィルバーフォースは、議会活動で奴隷貿易廃止法案をつくって何度も議会で提出した中心人物です。ヨークシャー選出の下院議員で、イギリス国教会を改革したいとの思いが強く、宗教活動をしたかったので、奴隷の問題はある程度までいっただけで辞めようと考えていました。そこにジョン・ニュートンという人が出てきて、「奴隷貿易廃止に身を捧げよ、それが君の使命だ」とウィルバーフォースを説得しました。ちなみに、このニュートンは、「アメイジング・グレース」という讃美歌の作詩をした人です。元奴隷船の船長で、4回くらい奴隷貿易を行っています。後に罪を認めて牧師になりました。牧師の活動の中で讃美歌を作り、それが人々の心に響いたのです。もう一人のトマス・クラークソンは衆議院で活躍する人ですが、ケンブリッジ大学で奴隷制を主題にしたラテン語の懸賞論文で優勝しています。彼はテストンにやってきて「自分の人生を反奴隷制と奴隷貿易廃止に捧げる」とはっきりと宣言しました。二人はいずれも「国教会を何とか改革しよう」という方向をもっていた人で、その中で、奴隷制や奴隷貿易の廃止のことが具体的な課題として浮かび上がってきたわけです。

ロンドン委員会の活動を拡大した有名な人として、ティーカップのブランド名にもなっているジョサイア・ウェッジウッドという人がいます。奴隷貿易廃止運動にかかわってメダリオンを作ります。これが一種のアイコンになって奴隷貿易廃止運動が広がった側面もあります。「私は、君たちと同じ人間ではないのか、君たちの兄弟ではないのか」と鎖でつながれて問いかけている絵柄をメダルにして売り出し、それを運動資金にしました。マンチェスター、ブリストル、リーズなどの町でネットワークができ、寄付金も得られ、クラークソンは寄付金を使って各地で奴隷貿易の情報や証拠を集めて請願運動を呼びかけるわけです。

議会請願運動

1788年1月にロンドン委員会は議会請願署名を呼びかけて、全国各地から署名を集め、3月までに100件以上の署名簿で、数万人規模の署名が届けられました。これが最初のキャンペーンとなりました。第一次のキャンペーンには弱点があり、請願署名の本来の目的が奴隷貿易廃止だったのですが、それ以外に奴隷制廃止の要求が出てきたり、奴隷の状態を改善するというような署名もあり、また署名数が地域によってばらつきがありました。これをバックに1791年4月に議会で論戦がありましたが、ウィルバーフォースが提出した議案、「奴隷貿易廃止法案」は否決されました。

第一次キャンペーンの後、自然発生的に砂糖の不買運動が起こりました。ウィリアム・フォックスの小冊子をきっかけに、西インド産の砂糖・ラム酒の不買運動が広がります。これは奴隷貿易廃止と砂糖消費という日常生活を関連づけた冊子として有名で、「アフリカから輸入された奴隷の生産物である砂糖を1ポンド消費すれば、2オンスの肉、奴隷の肉を消費したことになる」と計算しています。このように砂糖の消費が奴隷の肉体と関連していると具体的に伝わる書き方をしています。砂糖不買運動にはイギリス全体で30万人が参加したと推算されています。特に女性の参加が多かったと言われています。それをバックにした第二次請願署名が開始され、1792年3月末までに519件の署名簿、約40万人の署名が集まります。請願署名としては史上最大です。これを背景に4月20日、ウィルバーフォースが法案の動議を議会で提出します。しかし、決定にまだ踏み切れない人たちの雰囲気を感じたヘンリー・ダンダスという議員が、即時廃止ではなく徐々に廃止しようとする「漸進的廃止」を唱え、これが成立しました。最終的には1796年に廃止決定になりますが、1793年、下院は「これ以上奴隷貿易の問題を取り上げない」と決議しました。この後、ロンドン委員会は実質的に解散してしまい、冬の時代に入ります。この背景には、フランス革命とフランスとの戦争があります。フランスでも奴隷貿易廃止運動の組織がありました。イギリスの組織と連携していたのですが、イギリスの奴隷貿易廃止派のアポリシヨニストとフランスの革命派が結託したという噂が出て、イギリス側は否定したのですが、対仏感情とナショナリズムが強くなり、奴隷貿易廃止運動が下火になります。

もう一つ、1791年にハイチで奴隷反乱が起こっています。1804年には、ハイチで奴隷反乱が成功して、ハイチ独立に至ります。ハイチの奴隷反乱がイギリスの植民地に伝わって、それを遮断しないといけないということになりました。

19世紀に入ってフランスとの講和ができて、1804年にロンドン委員会が再建されます。今度はロビー活動が中心で最初は外国へ送る奴隷貿易を禁止します。南米のオランダ領、ギアナ向けの奴隷輸出禁止法が議会で通ります。一種のナショナリズムも関係していると思いますが、自国の利益を守るために外国向けの奴隷貿易を禁止します。その戦術が成功して、1807年2月に議会で圧倒的多数で可決され、イギリスの奴隷貿易が全面廃止されます。

「1807年5月1日以降、イギリスの港から奴隷船を出航させてはならない」「1808年3月1日以降、植民地に奴隷を荷揚げしてはならない」となります。

シエラ・レオネ植民地

奴隷貿易廃止運動の展開と平行して西アフリカのシエラ・レオネに植民地が形成されます。これは英黒人と関係していました。アメリカ独立戦争後にイギリス本国に連れてこられた黒人たちが多数に上りました。カナダのノヴァ・スコシアにも黒人が渡っています。その後ロンドンに貧しい黒人の存在が目立ってきて、これを救済するために「黒人貧民救済委員会」が結成され、慈善活動が展開され、食料、衣服、お金を与えます。しかし、財政負担が重く、在英黒人をどう処理するかということで、スミスマンという生物学者の提案により、在英黒人をシエラ・レオネに移送する計画が浮上します。これに真っ先に支持を表明したのがグランヴィル・シャープです。在英黒人にとって理想的な社会が築けるのではないかと考えたわけです。少数の白人も乗っていましたが、1787年に400人以上の入植希望者を船に乗せて出帆します。5月にシエラ・レオネに着いて、入植地をグランヴィル・シャープに因んで「グランヴィル・タウン（現在のフリータウン）」と名付けました。ところが、雨季だったので入植者が病に倒れてどんどん亡くなり、4年後には入植者が60人に減っていたという記録が残っています。結果的にこれは失敗に終わるわけですが、シエラ・レオネ植民地構想は終わりに終わったではありませんでした。国教会福音主義派が中心となりシエラ・レオネ会社をつくり、ノヴァ・スコシアから千人以上の黒人たちがシエラ・レオネにやってきました。この人たちが熱病にかかったりしましたが、何とか持ちこたえました。

次にやってきたのは、ジャマイカのマルーン出身の黒人たちです。マルーンは逃亡奴隷たちの共同体で、1795年に第2次マルーン戦争が起こり、これが鎮圧されて、追放された人たちがノヴァ・スコシアに渡って行きました。さらにこの人たちが自ら進んでシエラ・レオネに行きたいと言い、1799年にシエラ・レオネに送りこまれます。

イギリスで奴隷貿易が廃止されて以降、イギリス以外の国の奴隷貿易廃止について、イギリスが先頭に立って外交的、軍事的圧力をかけていきます。オランダ、フランス、スペイン、ブラジル、ポルトガル等々はイギリスとの条約で奴隷貿易廃止を宣言するのですが、実際にはそれで奴隷貿易が止んだわけではありません。特にブラジルとキューバは、19世紀に入り、ブラジルはコーヒー、キューバは砂糖のプランテーションが拡大していきますので、大量の奴隷を必要としていました。密貿易が活発になってきたのでそれを鎮圧するためにイギリス海軍が乗り出してきて、非法法の奴隷貿易を取り締まる役割を果たすわけです。奴隷船を見つけて拿捕してシエラ・レオネのフリータウンに連行しました。ここで裁判にかけられ、乗っていた奴隷たちは解放されます。1810年代以降、たくさんの黒人奴隷が解放されて、解放アフリカ人となっていきました。1844年までに解放されたアフリカ人は6万8千人以上います。シエラ・レオネに留まった人、外に出ていった人もいますが、1844年のセンサスではシエラ・レオネの人口が4万2千人になっています。在英黒人、ノヴァ・スコシアからきた黒人、マルーンの人たちに続いてやってきた解放アフリカ人が断然多く、その人たちがシエラ・レオネ植民地における多数派を形成しました。

奴隷制廃止

奴隷制の廃止に向けて、宗派的にはクウェイカー教徒と国教会福音主義派の二つが中心的な役割を果たしました。1823年にロンドンで反奴隷制協会が結成され、奴隷制廃止のための活動を展開しました。1831年クリスマスにジャマイカで大規模な奴隷反乱がおきますが、翌32年に鎮圧されています。ここはバプティストの教会の影響が強く、バプティスト反乱とも呼ばれ、約6万人の奴隷が参加したと言われています。これが奴隷制廃止に直接結びついたのでないかと考えます。ジャマイカの西部で奴隷反乱が起こり、最初は平和的なストライキだけを呼びかけていたのですが、殺人、放火と広がっていき、イギリスから軍隊が派遣されて、鎮圧されました。イギリス領植民地における奴隷制廃止は、1833年ですが、この時の争点は奴隷制

廃止後の奴隷の身分です。妥協の産物として奴隷は年季奉公人となり、家内奴隷の場合は年季4年、野外奴隷は6年、元の奴隷主の下で働くということになりました。また、私有財産である奴隷を解放するとプランターが損害を受けますので、結果的には総額2千万ポンドという莫大な予算を投じて彼らに補償しました。

その後、年季奉公人制度が廃止されるのは1838年です。時間の制約で最後の方の話はかなり端折りましたので、あとは、『奴隷船の世界史』（岩波新書 2019年）をご覧くださいと思います。ご清聴ありがとうございました。

2019年10月31日 同志社スピリット・ウィーク秋学期
今出川校地 「講演」記録